

別冊

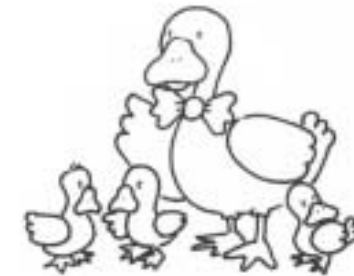
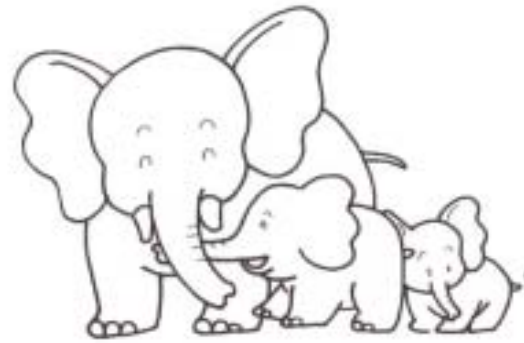
習志野市就学前子どもの保育一元カリキュラム指針

発達のみちすじと保育課題（別表）

平成15年4月  
習志野市

## 目 次

乳兒前期 ( 0 歲 ~ 1 歲半頃 )	1
乳兒後期 ( 1 歲半 ~ 3 歲頃 )	3
幼兒前期 ( 3 歲 ~ 4 歲頃 )	5
幼兒後期 ( 4 歲 ~ 6 歲頃 )	7



	0ヶ月	6ヶ月	1歳	1歳半	実践の重点及び配慮
身体的発達	<p><b>生理的反射</b> (呼吸、吸飲、まばたき、咳、くしゃみ、瞳孔反射など) 生涯存続</p> <p><b>原始反射</b> (把握反射、足指反射、驚き反射、自動歩行、哺乳反射など)</p> <p><b>共鳴動作</b> → 上下左右を追う 暖色を好む 一点をじっと見る → <b>左右180度の往復可逆追視</b> → 上下80度の往復可逆追視 → 360度の追視</p> <p>自分で頭を上げる → 90度頭を上げる → <b>首がすわる</b> → 胸を上げる(腹這い) → 重心の側方移動(横向き) → 仰向けから横向きになる(上半身での回転性の寝返り) → 仰向けからうつ伏せ → <b>寝返りの完成</b> → うつ伏せから仰向き <b>手掌支座位</b> がとれる</p> <p>体の動きに頭が遅れず動く → 後方に下がる <b>後ろ這い</b> (腕を突っ張る) → <b>腹這い</b> (足の第一趾を中心として蹴って前に進む) → <b>後方交差型四這い</b> 尻を上げ胸が上がる → <b>高這い</b> 膝を伸ばして両手、両つま先のみ着地 → <b>這う完成</b> → <b>前方交差型四つ這い</b> 左手 右手 右足 左足のロコモーションになる</p> <p><b>屈曲姿勢</b> → <b>左右対称姿勢</b> (手と手、足と足を合わせる) → <b>手足の伸展運動</b> (伸ばしたり、縮めたり) → <b>パラシュート反応</b> (体が下に落ちる時手足を細部まで開く) → <b>首の立ち直り反応</b> 体のバランスを崩した時に頭を中心の位置に戻すことができる → <b>つかまり立ち</b> → <b>伝い歩き</b> → <b>ハイガード歩行</b> (手を上に) → <b>ミドルガード歩行</b> (手が中間の位置) → <b>ロ-ガード歩行</b> (手を下にして)</p> <p>握らせるとわずかな間保持できる → 物に手を伸ばして握る(目と手の協応) → <b>手がもみじ状に開く</b> → <b>熊手型でつかむ</b> (積み木を持ち返る) → <b>親指を使ってつかむ(母指対向操作)</b> → <b>親指とひとさし指の指先でつまむ(尖指対向操作)</b></p> <p>7日ではっきりした音に反応 → 母親の声を聞き分ける</p>	<p>原始反射は6ヶ月までには殆ど消滅する。適切な時期に消滅することが、次の発達に非常に重要となる。</p> <p>共鳴動作とは、生まれて一週間の子が20cm離れた場所が見え、繰り返される動作を真似ること。これはコミュニケーションの基礎となる行動であり、20cmという距離は授乳の時の親と子の距離に等しい。したがって抱いて授乳することは、コミュニケーションの形成上重要である</p> <p>可逆追視とは、上下左右などの逆方向が追えることである。これは首のすわりと大きな関係がある。首の発達はその他咀嚼等にも大きな関係があり、発達上重要である。</p> <p>手掌支座位とは、うつ伏せで両手の平をしっかりと床につけ、腕を伸ばして胸をあげ、身体を支える姿勢。足が先行した寝返りが出来、手掌支座位がとれることが、次のハイハイの質に大きな影響を及ぼす。手掌支座位の姿勢を十分にとらせることが重要。</p> <p>望ましいハイハイとは、次の4つの条件を満たすことが大切。第一は首を起こして前方を見ながら這う。これは、歩行を獲得した後のバランスの保持に重要。第二はしっかりと開いた手の平と伸ばした指先で身体を支えること。第三は足の第一趾を中心としたつま先で床を蹴って前進すること。第四はロコモーションの問題であり、手足の左右交差パターンが確立していることが重要。</p> <p>6ヶ月頃から大人が座らせると座位の姿勢を保持できるがこうした受動的座位は自由のきかない姿勢で好ましくない。7～8ヶ月頃からハイハイするようになると、自力でお座りする。自主的、能動的座位がとれることが大切である。</p> <p>自力で立てない子どもに歩行練習をすることは、段階を飛び越した働きかけであり、その後の歩行の高次化につまづきを示す場合もある。例えば転びやすい傾向を持っていたり、転んだ時に手を伸ばして身体を支えることができず、顔や頭に怪我をしやすい。したがって保育の中では歩くことを焦らず、高這などの運動を十分に保障し、ゆっくり歩行の獲得を見守ることが必要。</p> <p>発達保障のためには、子どもの発達段階に応じた活動の中に、発達抵抗を組織していくことが重要。例えばハイハイや歩行の運動の時、坂や階段を登ったり降りたりするなど、やや難しい経験ができるようにする。</p> <p>子どもは「屈曲優位から伸展優位」へと発達していく。握った状態の手も5ヶ月ごろになると、きれいにもみじ状に開く。この手の開きは発達上重要であり、開きの悪い場合は発達につまづきがある場合が多い。</p> <p>子どもの手指は「小指側から親指側」へと機能分化していく。母子対向操作～尖指対向操作への獲得は、対話能力の獲得に重要である。</p> <p>子どもは日常生活の中でまず初めに目や耳や身体全体を使っでの意味的経験をし、その経験と、その時に発せられる周囲の人々との言語音とを結びつけて、言葉というものの意味や機能を取得していく。</p> <p>手当たりしだいに物をいじりまわしたり、探索することで子どもは物の性質や意味を学びとる。したがって物を壊したり、汚したりすることを嫌って、叱ったりすると、子どもの好奇心の満足を抑制してしまい、ひいては知的発達に影響を及ぼす。したがって危険のない環境を整え、十分な経験をさせていきたい。</p> <p>大人との一対一の関わりや親身な世話を通して、親密なコミュニケーションを経験し愛されることの心地良さを認識するようになる。こうした人との関わりや関わられることの心地良さが特定の大人との「基本的信頼感」をつくる。</p> <p>おはしゃぎ反応は子どもにとって、最初の対人関係の中での笑いであり、後に音声言語を獲得していくための、土台となるため、十分な関係を持つことが重要。</p>			
	知的発達	<p><b>鼻母音</b> → <b>喉子音</b> (うっくんうっくん) → <b>口唇閉塞音</b> (プップ) → <b>初期喃語</b> (あーあー、おーおー) → <b>喃語、志向の音声</b> (まーま、ぶーぶ) → <b>言葉と動作が結びつく</b> → <b>定位の音声</b> (あった) → <b>一語分</b> (ワンワン、マンマ)</p> <p><b>認知</b> (手先でいじる、口に入れてなめる、振る、ひっぱる、目の前で見る) → <b>志向の指差し</b> → <b>要求の指差し(模倣のできはじめ)</b> → <b>定位の指差し</b> → <b>可逆の指差し</b> (大人の質問に答える)</p>	<p>子どもは日常生活の中でまず初めに目や耳や身体全体を使っでの意味的経験をし、その経験と、その時に発せられる周囲の人々との言語音とを結びつけて、言葉というものの意味や機能を取得していく。</p> <p>手当たりしだいに物をいじりまわしたり、探索することで子どもは物の性質や意味を学びとる。したがって物を壊したり、汚したりすることを嫌って、叱ったりすると、子どもの好奇心の満足を抑制してしまい、ひいては知的発達に影響を及ぼす。したがって危険のない環境を整え、十分な経験をさせていきたい。</p> <p>大人との一対一の関わりや親身な世話を通して、親密なコミュニケーションを経験し愛されることの心地良さを認識するようになる。こうした人との関わりや関わられることの心地良さが特定の大人との「基本的信頼感」をつくる。</p> <p>おはしゃぎ反応は子どもにとって、最初の対人関係の中での笑いであり、後に音声言語を獲得していくための、土台となるため、十分な関係を持つことが重要。</p>		
心理的発達	<p>・快と不快の分化 ・泣き笑いの分化 <b>二項関係</b></p> <p>・人間の顔に対しての笑い ・社会的快 <b>おはしゃぎ反応</b></p> <p>・あやされると ・声を出して笑う ・誰にでも反応</p> <p>・見慣れた人にものみ笑う <b>人見知り</b> ・不安や恐れを感じる</p> <p>・大人との相互 ・交渉の芽生え ・自分の発見 <b>三項関係</b></p> <p><b>自他の区別</b></p> <p><b>自我の芽生え</b></p>	<p>子どもは日常生活の中でまず初めに目や耳や身体全体を使っでの意味的経験をし、その経験と、その時に発せられる周囲の人々との言語音とを結びつけて、言葉というものの意味や機能を取得していく。</p> <p>手当たりしだいに物をいじりまわしたり、探索することで子どもは物の性質や意味を学びとる。したがって物を壊したり、汚したりすることを嫌って、叱ったりすると、子どもの好奇心の満足を抑制してしまい、ひいては知的発達に影響を及ぼす。したがって危険のない環境を整え、十分な経験をさせていきたい。</p> <p>大人との一対一の関わりや親身な世話を通して、親密なコミュニケーションを経験し愛されることの心地良さを認識するようになる。こうした人との関わりや関わられることの心地良さが特定の大人との「基本的信頼感」をつくる。</p> <p>おはしゃぎ反応は子どもにとって、最初の対人関係の中での笑いであり、後に音声言語を獲得していくための、土台となるため、十分な関係を持つことが重要。</p>			

	0ヶ月	6ヶ月	1歳	1歳半	実践の重点及び配慮
生活	<b>睡眠</b> 昼と夜の区別不明瞭 → 夜8時間以上の睡眠(夜をとらえる) → 生活リズムの確立 → 昼の目覚めが10時間以上になる(昼寝3,4回) → 午前1回午後1回の昼寝 → 午後1回の昼寝(1~2時間)	<b>授乳、食事</b> 授乳3時間毎一日8回程度 → 一日5回程度 → <b>離乳初期</b> 離乳食1回(どろどろ状) 授乳4回 → <b>離乳中期</b> 離乳食2回(舌でつぶせる固さ) 授乳3回 → <b>離乳後期</b> 離乳食3回(歯茎でつぶせる固さ) 授乳2回 → <b>離乳完了期</b> 離乳食3回(歯茎で噛める固さ) 牛乳摂取	舌が上顎の吸啜に乳首を巻きつけるようにして押して飲む(重力を利用) 哺乳反射(4~6ヶ月頃で消滅) → 舌先の前後運動と顎の運動運動 ・口唇を閉じて飲み込む ・上唇の形変わらず ・下唇が内側に入る → 上下唇がしっかり閉じる ・左右の口角が同時に伸縮 ・数回もぐもぐして舌で押しつぶし咀嚼する。 → 上下唇がねじれながら協調する ・咀嚼側の口角が縮む ・舌の左右運動(咀嚼運動)	<b>排泄</b> 膀胱に尿が溜まるとすぐ反射的に排尿する → 尿管隔2時間以上尿意をもよおす → 尿がためられる 排便反射(授乳後すぐ排便) → 1日2回程度 排便 → 便が固くなり、いきむようになる → 意識的にいきむ → 便意をもよおす → 排便抑制 我慢、知覚	<p>二者を中心とした外界との関わりから「子ども-大人-第三者(物)」という関係が成立する。これが三項関係である。三項関係が形成されると、外界との関わりが大きく変化する。大人の指差しに反応するかなど、三項関係が形成されているかを把握することは、発達を捉える上で非常に重要。</p> <p>睡眠中の子どもの顔色、呼吸の状態をきめ細かく観察するよう心がける。(SIDSチェック)うつ伏寝はできるだけ避け、顔の廻りに、布団や物がなく、正常に呼吸が出来るような状態をつくる。</p> <p>授乳は成分の面でも母乳の方が優れていると考えられるが、姿勢やその他スキンシップなどの面でも優れている。したがってできるだけ、母乳に近い状態を保障し抱いて声がけしながら、子どもの目を見て微笑みかけて授乳をしたい。</p> <p>おむつ交換の場所は一定にし、子どもが不快から快になる大切な場面であるので、十分スキンシップをはかり、言葉がけと、微笑をなげかけ、ゆったり交換する。</p> <p>排尿行動を意識化させるために、排尿間隔が2時間以上になったら、トイレや、オマルで排尿させてみるのが良い。この時失敗することのほうが多いことを覚悟し、失敗しても決して叱らないように心がける。</p>
	<b>あやし遊び</b> (いないいないばー) ・見たり聞いたりする ・つかんだり、ひっぱたりする ・しゃぶったり、なめたりする ・音のする方、光の方を見る	<b>ゆさぶり遊び</b> (たかいたかい、お船はぎっちらこ) ・玩具を振り回す ・ひっぱたり、押したりする ・音の出る方に首を向ける ・聞きなれた音に耳を傾ける	<b>やりとり遊び</b> (ちょうだい、まてまて) ・音のするものに興味をもつ(つかんだり、叩いたり、振る) ・入れたり出したりする ・物をつまむ ・ボールを追いかける ・おつむてん、いないいないばーを真似る ・紙破り ・リズムに合わせて体を動かす ・人の真似が盛んになる ・動物に関心を持つ	<b>模倣あそび</b> ・わらべ歌遊び ・押したり、ひっぱたりして歩く ・乗ったり、降りたり、すべったりする ・ころがして追いかける ・両手を使って音を出す ・リズムに合わせて体をゆする ・積み木を積んだり並べる ・蓋の開け閉めをする ・砂場にどっかり座って遊ぶ ・水遊びを喜ぶ ・身近な動物の鳴きまねをする ・スコップやコップを使っての砂遊びや、水遊びをする	<p>6ヶ月ごろから子どもは、大人の歌やリズムカルな声がけで、身体をゆずられてあやされる「揺さぶり遊び」を好み平衡感覚を養っていく。揺さぶり遊びの中で「首の立ち直り反応」や「保護伸展反応」が確かに獲得されていく。しかしあまり低月齢の子どもに激しい揺さぶりをすることは、脳が完全に形成されていない状態なので、危険である。子どもの発達に合った揺さぶりを行なっていくことが重要である。</p>
保育課題	<p>・衛生的で安全な環境をつくり、常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常は早く発見し快適に生活できるようにする。</p> <p>・一人ひとりの生活リズムを重視し、食欲、睡眠、排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。</p> <p>・子どもの泣くという要求表現に対して、大人がその表現を受け止め、適切に世話をし、生理的快、社会的快の状態を保障して、基本的信頼関係を作っていく。その上で目と目を合わせた「あやし遊び」「揺さぶり遊び」などを繰り返し行うことにより、コミュニケーションの基礎を培い、活動意欲や要求を表現する力を育てることが重要だと考える。さらにこうした遊びを通して、首の立ち直りを強くし発声の土台を育てると共に平衡感覚を養ってく。</p> <p>・歩行を獲得していくための、前段運動である寝返り、ハイハイ、伝い歩きなど、それぞれのみちすじを大切に、発達をよく見極め、適切な時期に獲得することができるように援助する。この時重要なのは、「いつできた」ではなく「どのようにできているか」ということである。一つ一つの動きを質、量ともに豊に保証し、十分に行うことが大切である。特にハイハイは、広い空間と共にハイハイをする仲間を保障しながら楽しく経験していく。</p> <p>・全ての発達の基礎は特定の大人との親密な関わり、(二項関係)であり、それを土台として物に働きかける三項関係が成立し、より豊に発達してくる。子どもに関わる保育者は、子どもにとって、人との関わり的重要性を深く認識し、豊かな愛情を持って接していくと共に、その成長発達の喜びを共有できる存在であり続けることが出来るようにしていく。</p>				

	1歳半	2歳	3歳	実践の重点及び配慮	
身体的発達	<b>直立歩行の確立</b> (ローガード歩行) 抵抗のあるところを好んで歩く 走る	後ずさり、横歩き、友達と手をつないで歩く	つま先歩き かかと歩き 足踏み	抵抗に対して好んで取り組み、乗り越えるのは活動意欲の高まりの現れである。したがってこの時期は、積極的に施設外に出て散歩するなど、発達抵抗を積極的に組織したい。	
	<b>直立姿勢</b> 斜め姿勢の獲得 少し高い所から飛び降りる	片足を上げる 目をつぶって立てる 手を下につけて片足を上げる	少しの間手足をきちんと立てる 両手を上げて片足立ちできる	斜め姿勢は、手足の指先に力を入れて瞬時的に体位を変動させ、バランスを復元させる。これによって四肢の左右交互性を一層確立させていくので、とても重要。これがもとになって重心を移しながら、体を動かす様々な動作が可能になる。	
知的発達	<b>階段</b> 両足を一段ずつそろえて登り降り姿勢で後ずさり降りる	両足を一段ずつそろえて登り降りする 下り斜面を降りる	片足ずつ交互に出して階段を登り降りる	脚が0脚からX脚に変化してくる。この足の開きが目立つ場合は、一応医師の相談が必要。脚力が弱く、転びやすいといった状態となるため、注意が必要となる。	
	<b>正座</b> しゃがむ 立位からしゃがんで物を拾う	しゃがんで移動できる		道具を持ち、繰り返し使いながらその道具本来の使い方を理解し、使うことを「対象的行為」という。対象的行為は1歳半~2歳半の子どもにとって重要な活動である。この時期までの子どもたちは、言葉で思考するのではなく、何でも触り、試したりと操作をして思考している。豊かな発想や、創造性のためにも、さらには言語発達のためにも、道具を使つての水遊び、砂遊びなどを十分に経験する。	
心理的発達	<b>親指と人差し指の指先でつまむ(尖指対向操作)</b> 道具に興味を持つ	手の左右、上下の移動 動く支点が一つ(往復のある描画) <b>手首のコントロール力がつく</b> 支点が2つ(肘と手首、肩と肘) 円錯画(ぐるぐる丸を描く)	<b>ねじる</b> 容器の蓋を開ける 扉のノブを回す ねじる、曲げるなど2つの動きを連動させ蓋を開けたり形を変える	<b>尖指対向操作の確立</b> 左右の手の機能分化と協応	1歳過ぎ頃から、少しずつ一語文を獲得し始め、1歳半頃には急速に増える。しかし語彙数によって、子どもの言語表現能力を評価することは、適当ではない。身振りや指差しなどの表現や、言語理解などのコミュニケーション能力がしっかりしていることが重要であり、これが身に付いている子は、急速に語彙が増えてくる。この力が不十分な子は、その後の言語発達につまづきや、後退を見せることもある。
	<b>一語文(名詞)</b> ワンワン、マンマ	<b>一語文の分化</b> (使い分けが出来、用い方が厳密になる。30語前後) 自分の通称が言える(みーちゃん、ノンちゃん)	<b>二語分(ワンワンチャタ)</b> 名詞+動詞 300語前後 自分の名前を入れて話しを要求する(しーちゃんね なんだ)	<b>三語文他語文</b> (形容詞を使う)	それまでは、全てを「ワンワン」と表現していた子どもが猫を見れば「にゃーにゃー」犬を見れば「ワンワン」と表現が分化してくる。
心理的発達	言われた事を理解し行動する(牛乳持ってきてなど、一つの指示)	二つ言われた事を理解し行う(手を洗ったらおやつを食べる)	大人と一緒に道具や素材を使って集めたり、運んだり、並べたりする	2歳近くなると、子どもは二語分を獲得し始める。二語分の獲得には、動詞の獲得が必要である。言葉を意識し始める時期は、生活の中で、大人のいろいろな直接の語りかけが重要となる。	
	3個以上積み木を重ねる(積み直し、並べ直し)	初期の入れ分け 片方に入れる	一個ずつ交互対称性を持った入れ分けができる	多い、少ないが分かる丸、四角を基本とした形の区別ができる(対比的認識の獲得)	2歳半頃までの子どもたちは「感覚運動操作」によって思考している。したがってこれまでの探索活動は思考活動そのものであり、十分な経験が次の発達に重要。2歳半頃からは言葉で考えることができ、「対象的行為」がその思考活動になる。こうした発達の変化を良く見極め、適した関わりをしていくことが大切である。
心理的発達	<b>自我の芽生え</b> ・心の中に対が出来る始める(～ではない～だ) ・もっと自分が(だだこね) ・主人公になりたい(心の高まり) ・自分の席、自分の物に執着 ・場面が変わる時、心の「よりどころ(枕、タオル、人形)」を使う	<b>自我の誕生</b> ・「～ではない～だ」と自主的な決定をする ・気持ちの立ち直りが出来るようになる	<b>自我の拡大</b> ・「いや」が頻繁に出る 自分でしたい、自分で決めたい気持ちの増加 ・「ひとつ」「たくさん」が分かり、自分には最大、他者には最小 ・好きな人やロボットになりきって不安を乗り越えようとする	<b>自我の充実</b> ・自分との関係の強弱で自我を制御し始める(自分より小さい子に分けてあげるなど) <b>二分的評価の時期</b> 良い-悪い できる-できない 得意-苦手	大人からの質問に答えるのを「可逆の指差し」と言う。これは言語理解の面で1歳半の質的転換期を越えて次の段階に入ったかの指標となる。大人の言語を理解しそれによって見通しのある行動が出来るようになるということである。一人一人の育ちの状況を1歳半の時点で確認することは重要である。
	<b>友だちへの関心 = 三層関係の形成</b> 自分と同じレベルの友達 = いいもの探しを共有しあう存在であり、憧れたり遊具を取り合う仲間 自分より小さい友達 = 興味、関心の対象、始めは反応への不安あり、2歳になるとおねえちゃんとして関わろうとする。 自分より大きい友達 = 好奇心の眼差しを輝かせ憧れの的。怖いこと、初めてのことも憧れの心の高まりで乗り越える。	<b>二人のイメージの共有</b>		この時期は「よくばりな心」が強くなり、トラブルも絶えない。しかし一方この段階は本当の所有関係の認識が芽生える時でもある。この欲張りな心の高まりが、言葉が話せるようになり、対比的認識(大-小、長-短)の獲得を支える土台のひとつとなる。	
心理的発達	「出来る、出来ない」など「二分的評価」をするようになると、「できなかった」事実を積み重ね、苦手意識を持つようになる。この苦手意識を乗り越えていき、自分の世界を広げていくことが出来る為には、大人の言葉かけが重要になる。苦手があっても、どの子も光輝くことがある。この光を丁寧に見出し、共に乗り越えていくことが大きな大人の役割である				

	1歳半	2歳	3歳	実践の重点及び配慮
生活	<p><b>睡眠</b> 午後1回の昼寝(1~2時間)</p> <p><b>食事</b> 好き嫌いがはっきりしてくる。だいたい一定時間で食べる。</p> <p>こぼしながらもスプーンで食べようとする</p> <p>コップを両手で持って飲む</p> <p><b>排泄</b> 出たとき尿意を知らせる 汚れた時に知らせ始める 不快感を感じる</p> <p><b>着脱</b> ・パンツを脱いだりズボン脱ぐ ・手伝ってもらいながら、上衣を脱ぐ</p> <p><b>清潔</b> 蛇口をひねってもらって手を自分で洗う 鼻が出たら知らせる</p>	<p>夜の睡眠時間は11H~12H</p> <p>姿勢正しく食べる → こぼさず食べる → 嫌いなものでも促されて食べようとする</p> <p>スプーンを上手に使うようになる(下手持ち) → 箸に関心を持つ</p> <p>コップを片手で持って飲む</p> <p>尿意、便意を感じたらトイレに行こうとする</p> <p>・尿意、便意を知らせトイレで排泄する ・すこしずつ我慢できるようになる ・失敗が少なくなる</p> <p>・パンツを脱がずに下ろしたまま で、排泄しようとする ・自分で拭こうとする ・水を流す</p> <p>・パンツを自分で履こうとする ・靴を履こうとする</p> <p>・上衣を手伝ってもらって着る ・ボタンを自分でしようとする ・パンツが履ける</p> <p>・自分で衣服を着ようとする ・大きいボタンははめられるようになる ・靴も自分で履くが左右違うことがある</p> <p>促されて自分で手を洗う 鼻が出たらかもうとする</p>	<p>対比的認識の獲得により、子どもたちは出来るか、出来ないが常に葛藤している。「お兄ちゃんになりたい」「お姉ちゃんになりたい」と思っているが、本当になれるかと不安を持っている。こんな時に「頑張ること」「しっかりすること」を押し付けられたら、さらに不安になる。よく子どもの心の中を察しながら、一つ一つの思いに共感することから、保育を始めたい。</p> <p>子どもは新陳代謝が盛んで、運動も活発であることから、長時間睡眠が必要である。</p> <p>食事の回数は成人と同じ、朝、昼、晩の3回となり、時間帯もほぼ同様となる。しかしまだ1食の食事での摂取できる量は少なく、栄養面で不足分を間食として補う必要がある。</p> <p>スプーンや箸の使用と手指の発達とは、大きな関連がある。手の回転が出来るようになり、スプーンを自在に使うことができ、利き手の第4指が自在に動くようになることで、箸が思うように使える。こうした、手、指の機能の発達をよく把握し、個々に応じて進めていくことが重要である。</p> <p>排泄の自立は個人差があり、子どもの生活環境の変化や、トレーニングを迎えた月齢と季節との関係、さらにはその時期の心理的抵抗などにも影響されることが多い。さらには一旦自立したように見えても、又元にもどることもある。保育者は焦らずゆっくり声をかけて排泄の自立に対処していかななくてはならない。</p>	
遊び	<p><b>模倣遊び</b></p> <p>・積み木を3個以上積み重ねる ・積みなおし、並べなおし、器への入れ直しができる</p> <p>・手を動かして描くことを楽しむ(上下、左右)</p> <p>・階段を登ったり、坂道のあるいたり、起伏のある場所を好んで歩く ・足を止めいろいろなものに関心を持ち触れたり、試したりする。</p>	<p><b>みたてつもり遊び</b></p> <p>・8つ以上の積み木を積み重ねる ・積み木を並べその上に積むなど2つの遊びを組み合わせる</p> <p>円など曲線が描ける(形の区別が分かり組み合わせる遊び)</p> <p>目的を持って散歩に行く(公園に行こう、ワンワンを見に行こうなど)</p>	<p><b>ごっこ遊び</b></p> <p>・意図を持って表現する(縦と横の結合)</p> <p>描いたもの、作ったものに意味づける</p> <p>散歩で、でこぼこ道や坂道を歩き、長い道のりを歩くことができるようになる</p>	<p>身辺自立は、自分で出来る喜びを味わうと共に、大好きな大人に認めてもらうことで、次の楽しいことに対し、頑張ろうとする見通しの力をつけていく。したがって大人はこの達成感を共感していくことが重要である。</p> <p>一見単純に見える「見立て、つもりあそび」だが、子どもなりの世界があり、具体的にイメージがあり、意味がある。子どもはこの「見立て、つもり」の世界の楽しさを知ると、より一層「見立て、つもり」を豊かにしていこうとする。つまり、「見立て、つもり」はイメージ力の「製造工場」であり、このイメージの力が、幼児期の表現を豊かにしていく。それは、描く、作るだけでなく、やがてイメージ豊かな話し言葉が文脈を作る力に結びつき、書き言葉の世界を作る土台となる。したがって、十分にこの経験が出来る環境を整える必要があり、特に重要な点は1、再現してみたい生活経験の豊かさをつくる 2、子どもたちが主人公になり「見立て、つもり」を発展させること 3、「見立て、つもり」のイメージの世界を保育者が共有することである。</p> <p>歩行の完成と共に、子どもたちは日々「いいもの探し」をする。「これはいったいなんだろう」と見入ると、必ず友達がやってくる。友達が見つけたものは何でも光り輝き、その世界を共有し始める。「いいもの探し」の心が友達の見つけたものへの憧れの心を育む。憧れこそ、発達を導くエネルギーであり、いろいろなことを学んでいくための原動力である。したがって、散歩や庭の散策などの活動を積極的に進めていきたい。</p>
保育課題	<p>・24時間の生活リズムを作ることが基本となる時期である。睡眠のリズムをはじめとし、食事や排泄、遊びなど諸活動を毎日の生活の中で規則正しく繰り返していく必要がある</p> <p>・対象的行為と探索活動はこの時期の子どもたちの思考そのものである。したがって何にでも触り、何でも試す。こうした経験ができる場所と時間を十分に保証し、満足いくまで繰り返すことで次の言語発達を促し、豊かな想像性や意欲へとつなげていく。</p> <p>・拡大する自我の育ちを大切に受け止め、切り替えしたり、受け止めては意味付けをするなどして、心の通い合う世界を共有しながら、第二自我への準備をしていくことができるようにする。</p> <p>・歩くことや、全身運動を十分に保障する。特に散歩などで、自然との関わりや友達との触れ合いなどを積極的に行いながら、十分に歩き、十分に動くことで、直立姿勢と、二足歩行を確立していき、歪みのない身体をめざしていく。</p> <p>・「つもり、みたて遊び」を大いに保障する。子どもが生活の主人公を演じ、自分のイメージを十分に広げることができるよう、いろいろな仲間と過ごせる場や、時間、空間を整え、大人の適切な関わりによって、さらに人間関係や生活経験を広げていくことが出来るようにする。</p>			

		発達のみちすじ			実施の重点及び配慮
		3歳	3歳半	4歳	
身体的発達	姿勢・運動	<p>3歳前後</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     直立二足歩行が安定してくる。「あおり動作を伴う踵、つま先歩行」が可能になる。土踏まずも形成されてくる。                 </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>3歳頃</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     走る、跳ぶ、飛び降りる、登る、しゃがむなどの基本動作を獲得していく。                 </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                     階段を昇る時は片足ずつ交互に出すことができるが、降りる時は同じ段に両足を揃える。                 </div> <div style="width: 10%; text-align: center;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                     3歳半頃                      階段を昇る時、降りる時、片足ずつ交互に出せるようになる。得意の足でのケンケンができるようになる。                 </div> </div>			<p>あおり動作とは前に出した足の踵から着地し、土踏まず以外の足裏の全てをつけて体重をかけ、反対の足を前に送った後、後ろの足の踵を地面から離し、つま先で地面を蹴りながら、その足を前に送っていくことである。</p> <p>・この時期の子どもには、何よりも足腰を強くする全身運動を保障することである。走る、跳ぶ、飛び降りる、登る、しゃがむなどの基本動作が、充分に行なわれる運動遊びを積極的に行なうようにする。</p>
	手指・操作	<p>3歳前後</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・尖指対向操作が確立する。物を拇指と示指で摘まみ、それを手のひらに握りこんで、さらに次のものを摘まむという操作を繰り返せるくらいの力が育ってくる。遊びや生活のなかで友達と会話をしながら、しっかりと手や手指を使うことができるようになる。</li> <li>・示指と中指を立ててジャンケンの「チョキ」で2つを表し、模倣することが可能となる。さらに環指を立てて3つを示すことができる。</li> <li>・描画活動</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                     円錐画(手の運動の軌跡)ではなく、閉じた一重の丸が描けるようになる。すると次第に大きい丸と小さい丸を組み合わせせて顔を描くなど、イメージを先行させて描画するようになる。                 </div> <div style="width: 10%; text-align: center;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                     縦線と横線を組み合わせて十字を模倣して描くことができるようになる。                 </div> </div> <p>・道具の使い方も次第に巧みになる。はさみを利用して、連続切りで直線を切ることができるようになる。手に持った紙を動かしながら切ることにより、紙に描かれた絵を大雑把に切り取ることが可能となる。</p>			
知的発達	言語・認識	<p>3歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話ことばが豊富になる。語彙の飛躍的増加とともに三語文や多語文などの長いことばも話すようになる。</li> </ul> <p>・話をしている人を見て、興味がある話であれば、聞けるようになる。また、絵本やお話を聞くことが楽しくなる。</p> <p>・音、色、文字、数、量、形、等に興味をもち、違いに気づくようになる。</p> <p>・興味深い歌や楽器演奏を聴いて楽しむようになる。簡単な曲に合わせて手を打ったり、身体を動かしてリズムをとったりすることを楽しむ。</p>			<p>・大人とのコミュニケーションを楽しみたいという子どもの気持ちを受け止め、子どもの興味、関心に沿って話しかけたり、子どもの話を聞いてあげたりすることで、積極的に会話を引き出していく。</p> <p>・言語は思考・認識の手段であるから、言語の幼さは思考・認識の幼さにつながりやすい。いわゆる幼児語(赤ちゃん語)が大人のことばにスムーズに移行できるような配慮が必要である。</p> <p>・この時期特有のいろいろな質問に丁寧に答えてやることや、拒否反応に丁寧に付き合ってやるのが大切である。そうすることによって、コミュニケーションの手段としての言語能力、及び思考・認識の手段としての言語能力を高めていくことになる。</p> <p>・子どもたちの生活の中で、興味深いものが登場する絵本を見たり、読んでもらったりする環境や機会を設けるようにする。絵本の読み聞かせ、絵本の中の事物についての知識を育てることや描画遊び、言葉遊びなども始めることが大切である。</p> <p>・音、色、文字、数量、形などについての興味関心を生活の中でもたせていくことが必要である。</p> <p>・歌や楽器演奏を聞いて楽しむ機会を増やし親しませていく。</p>
心理的発達	自己形成	<p>3～4歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは、乳児期に形成した自我と、次いで形成中の第二自我という二つの自我世界の中で生きようになる。自我は身体が求める要求の自我であり、第二自我は、社会的存在としての自分がどう行動すべきかという規範の自我である。この二つの自我を自分の中で対話させながら、自分はこういうことをしたいが、今はこういうふうに行動した方が良さだろうという自己決定するのがなかなか難しい時期である。自我と第二自我は、まだ別々のものとして存在し、なかなか結びつけられないのである。</li> <li>・言っていることはなるほどと思わせるものがあったとしても、実際にやっていることは、やりたいことをやっているだけということも珍しくない。この時期の子どもは、他人に厳しく自分に優しい態度を示したり、他者の考え方、言動についてわからないでぶつかったりすることがある。</li> </ul>			



		発達のみちすじ			実践の重点及び配慮
		3歳	3歳半	4歳	
生活	睡眠	3歳頃 ・夜の睡眠時間は11～12時間。昼寝もしない子も見られる。		4歳頃	<ul style="list-style-type: none"> <li>・24時間生活リズムの確立が基本となる。睡眠、食事、排泄、清潔、着脱などの基本的な生活習慣をほぼ身につけて、身辺自立ができるようにしていく。そして、人とのかかわりが多くなる中で挨拶や身のまわりの整理、交通安全などの習慣についても注意を向けられるようにする。</li> <li>・大人が生活の中でやってみせたり、コツを知らせたりしながら、自分なりにやってみようという気持ちを大切に。少しでもできたことを認め、できたことがんばったことの喜びやうれしさに共感し、自信や意欲をもたせていく。</li> <li>・どんなお手伝いや用事に興味・関心をもって取り組めるのか、また、先生や友達のためになったという気持ちももてるのかなどを考慮しながら、手伝いの場面を意識的に設けるようにする。</li> <li>・園内外の四季折々の自然に触れる機会を十分もち、自然の美しさ、不思議さなどの気付きを大切に。そのためには、大人が自然の様々な変化や現象に敏感でなければならない。</li> </ul>
	食事	・箸に関心をもつ。 ・嫌いなものでも促されて食べようとする。		・箸を使って食事をするようになる。 ・友達と楽しく食事をする。 ・嫌いなものでも少しずつ食べようとする。 ・よく噛んで食べる。	
排泄	・便意、尿意を知らせ、自分でトイレに行く。 ・失敗することもあるが適宜一人で排泄する。 ・少しずつがまんできるようになる。		・排泄の失敗がなくなる。 ・排泄後の始末がほぼできる。		
着脱衣	・衣服の着脱の順番が分かり、自分でやろうとする。 ・ボタンのとめはずしを自分でやろうとする。(直径1cm程度の大きさ)		・順序よく着脱ができる。 ・ボタン、スナップのはめはずしができる。		
清潔	・不完全でも歯を磨き始める。顔を洗っても泣かなくなる。 ・排泄後や遊びの後に、手を洗うようになる。		・うがい、歯磨きの習慣が身につく。 ・鼻をかみ、身体を清潔に保とうとする。 ・髪をとかす。		
片付け	・後片付けをするようになる。簡単な用事や手伝いを頼むと喜んでやるようになる。		・持ち物や身の回りの始末をしようとする。		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りで起きるいろいろな出来事や物事に親しみ、興味をもち、模倣したり自分からかかわったりするようになる。</li> <li>・身近な動物や植物など、自然に触れ驚いたり、親しみなどを感じて世話をしたりすることに興味をもち始める。</li> </ul>			
遊び	3歳頃 ・日常生活を再現した多様な「ごっこ遊び」が展開される。  ・身近な話を題材にした「追いかけて遊び」が始まる。 ・砂や粘土など、可塑性のある素材を使って遊ぶようになる。みたて遊びとしては、できたものに名前をつけるのではなく、イメージを描いてから作るようになる。 ・身体諸機能の発達状態に比例して、全身を使って遊ぶようになる。(ボール遊び、水遊び、かけっこなど)		3歳後半 ・わらべ歌遊びがより面白くなる。 (縄跳び、おにごっこ、まり、お手玉など)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みたて、つもり遊び」を豊かにし、「ごっこ遊び」に発展させていくには大人の働きかけが大切となる。</li> <li>・「ごっこ遊び」を始めるのは、子どもの中で自我が拡大し、第二自我の形成の準備が進み、自主性への志向と大人との共同生活への志向が育っていることが前提といえる。大人の豊かな経験を披露したり、多様な道具、遊具を用意したりして教育環境を整えること、仲間、時間、空間を保障することが大切である。</li> </ul>	
保育課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが、健康で文化的な生活をするには、生活の中心である遊びを軸として、いろいろな出来事に参加したり、自然に触れたり、お手伝いや動植物の世話などをしたりして、1日の流れが豊かに無理なく組み立てられているかどうかを配慮していく。</li> <li>・乳児期に形成した自我と、形成しつつある第二自我という二つの自我世界を生きる子どもの葛藤に大人が丁寧に付き合うことが重要である。子どもは様々なトラブルに見舞われて、その都度、子どもなりに悩みつつ思考し、大人から言われたことについては、子どもなりに考えて、自分の言葉で言い表せる第二自我を形成している。大人がそうした状況に共感し、対話することで丁寧に付き合い二つの自我の折り合いをつけ、葛藤の出口を一緒に探してやるのが大切である。</li> </ul>				



		4歳	5歳	6歳	実践の重点及び配慮
身体的発達	姿勢・運動	4歳頃	<ul style="list-style-type: none"> <li>手と足、及び右と左の「協応運動」が巧みになってくる。                             <ul style="list-style-type: none"> <li>手と足の「協応運動」～両腕を横に水平に伸ばして走るトンボの運動、手を上に上げ耳に見立てて両足でびよんびよん跳ねるウサギの運動など</li> <li>右と左の「協応運動」～両足それぞれの足でケンケン、スキップ運動など</li> </ul> </li> <li>「協応運動」は次第に年齢と共に高次化し、縄跳び、竹馬、跳び箱、鉄棒などの運動が可能となる。</li> </ul>		<p>※「協応運動」とは二つの別々の動きを一つにまとめあげた動作である。「～シナガラ～スル」という動作である。</p> <p>・両手の協応、指先の機能分化、目と手の協応、など多様な面で重要な力を獲得する時期である。ここで獲得した力がその後の生活に大きく影響する。日々の保育の中で次のような活動を豊かに展開することが必要である。</p> <p>①全身運動を十分に保障し、体力を育てる。特に「手押し車」など、手で身体を支える運動により、肩、腕、手首を強くする。(子どもの運動発達は中心から末端へと進む。指先の不器用な子どもは手首のコントロールも悪く、腕、肩の力も弱い。従って、手の操作性を高めるためには、体幹から育てる視点が必要である。)</p> <p>②はさみ、包丁、釘や金づち、などの道具を使う活動を十分に行なう。</p> <p>③伝承的文化を受け継がせること。(おはじき、お手玉、竹とんぼ、折り紙、だるま倒し、綾取り、剣玉など)</p> <p>④手遊び、指遊びをして遊ぶ。(指先を細かく動かす、優れた遊びである。)</p>
	手指・操作	4歳頃	<ul style="list-style-type: none"> <li>手指操作という微細運動の領域においても「協応運動」が巧みになり、右手と左手の協応動作が確立する。右手と左手が別々の動きをしながら、一つの動作をまとめあげていく。</li> <li>道具の使用が巧みになる。はさみを使って、単純な直線切りではなく、線に沿って形を切り抜くことができる。一方の手で紙を持ち、その紙を動かしながらもう一方の手で連続的にはさみを開閉し、形を切り抜こうとする。</li> <li>用途に応じて、様々な道具の使い方ができるようになる。</li> <li>音に合わせて両手を交互に握ったり開いたりできるようになる。</li> <li>指先の機能分化が進み、手遊び、指遊びが巧みとなる。</li> <li>描画活動～目と手の協応も巧みとなり、次第に次のような図形が描けるようになる。                             <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;四角形&gt; → &lt;三角形&gt; → &lt;菱形&gt;</li> <li>*縦線と横線の組み合わせ      *斜線と横線の組み合わせ      *斜線のみ組み合わせ</li> </ul> </li> </ul>		
知的発達	言語・認識	4歳頃	<p>【コミュニケーション手段】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>友だちとの共通体験をもとに、対話を弾ませることができる。</li> <li>自らの経験をたどたどしくともみんなの前で話すことができる。</li> <li>自分の気持ちや経験を一応筋道立てて人に伝えることができる。</li> </ul> <p>・作り話を話す子どもも見られる。一つは、話す力はあるのだが、経験が少ないので夢物語を語ってしまう。二つは、相手が必ず驚くだろうという反応を期待して作り話をする。言語の力が育ち、対話に対する要求が高まっている。</p> <p>・外言と内言の間である「つぶやき語」が多くなる。</p> <p>【思考・認識の手段】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>思考・認識の手段としての言語機能が確立する。</li> <li>内言が十分育ち、行動のコントロール手段としての言語機能がしっかりとしてくる。→自制心の育ち</li> </ul> <p>【行動のコントロールの手段】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>人の話を聞こうとする態度が見られる。</li> <li>注意して聞くようになる。</li> <li>最後まで聞くようになる。</li> </ul> <p>・興味のあるものなら、かなり長時間持続して取り組めるようになる。</p> <p>・ものごとに集中したり、継続的に取り組んだりしながら、試す、工夫するなどの姿が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文字や数量、図形等に関心が強くなる。</li> <li>簡単な文字、数字、記号などが読めるようになる。絵本や手紙、壁新聞、時計、カレンダーなどを興味深く見るようになる。</li> <li>自分の名前を書くようになり、その他にも伝えたいことを書き始める。</li> </ul> <p>4歳半頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>対位概念の中に「中」が成立する。相対的な比較が可能となる。大—小の対位概念に、「中」が入ってきて大よりも小さいが、小よりも大きいという相対的な概念がわかる。</li> <li>歌や曲に合わせて簡単な分担奏ができる。曲に合わせて体を動かすことを楽しむ。友達と一緒に音楽を聴いたり歌ったりすることを楽しむ。</li> </ul>		<p>※言語の3つの手段</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①コミュニケーションの手段</li> <li>②思考・認識の手段</li> <li>③行動のコントロールの手段</li> </ol> <p>・子どもの作り話を子どもの発達要求として受け止めたい。</p> <p>・思考する時の自問自答するような「つぶやき語」を大切にす。</p> <p>※「つぶやき語」とは、内言の未発達な幼児が自己に語る場合独り言をつぶやく。これを「つぶやき語」と言う。「つぶやき語」は、言語を用いて考えたり、言語で行動を自己統制したりできるようになってきた証といえる。</p> <p>・5～6歳の時期に子どもの言語による行動の自己コントロール機能と内言の発達の状態をしっかりとみておく必要がある。内言の発達が悪いと、思ったことを全て口に出してしまい、行動が伴いにくく、話す内容が拡散していく傾向をもつ。また、行動が衝動的になる。</p> <p>・発表の形で人に話す経験を重ねると内言の発達につながる。友達の前で生活経験を発表する機会を設定するなどの配慮をしていきたい。</p>
	自己形成	4歳頃	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者の目や言葉が気になり始める。自分が上手か下手かの自己評価が揺れ動く時期である。自分が下手かと思った時に自信を失うこともある。</li> <li>4歳半頃                             <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもは自我と第二自我を自己内対話させながら、生きる力を自分のものにしていくようになる。「～シタイケレドモ～スル」という形で、自我を切り返しながら生きる力を獲得していく。</li> <li>5歳半頃                                     <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の立場と相手の立場の違いもわかりさらに自分と相手のつながりも理解し自分の行動を律していくことができる。</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>		

	4 歳	5 歳	6 歳	実践の重点及び配慮
生活	<p>睡眠</p> <p>4 歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>夜の睡眠時間は 1 1 ～ 1 2 時間。昼寝をしない子も見られる。</li> </ul> <p>食事</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>友達と楽しく食事をする。</li> <li>嫌いなものでも少しずつ食べようとする。</li> <li>よく噛んで食べる。</li> </ul> <p>排泄</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>排泄の失敗がなくなる。</li> <li>排泄後の後始末がほぼできる。</li> </ul> <p>着脱衣</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>順序よく着脱ができる。</li> <li>ボタン、スナップのはめはずしができる。</li> </ul> <p>清潔</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>うがい、歯磨きの習慣が身につく。</li> <li>鼻をかみ、身体を清潔に保とうとする。</li> <li>髪をとかす。</li> </ul>	<p>6 歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 0 ～ 1 1 時間。昼寝をしなくなる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>食事の仕方が身につく。</li> <li>食べ物と身体の関係に関心をもって食事をする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>排泄や後始末を上手にする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>一人て衣服の着脱がきちんとできる。</li> <li>脱いだものを一定の場所に置く。</li> <li>必要に応じて衣服の交換や調節をしようとする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>入浴時に自分で身体を洗えるようになる。</li> <li>汗が出たらハンカチで拭く。</li> <li>清潔にしておくことが病気の予防と関連することが分かる。</li> <li>身体や衣服、持ち物などを清潔にする仕方を身に付ける。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭、園、地域の連続性のある生活の流れで、生活プランを確立することが基本となる。保護者と保育者がパートナーとして、子どもの発達のみちすじに沿った生活プランを打ち合わせ、子どもが見通しをもって生活や遊びができるようにしていくことが大切である。子どもが基本的な生活習慣を確立し、集団生活での基本動作や身辺自立ができるようにしていく。</li> <li>就学も意識して、早寝早起きの生活リズムが身につくよう、家庭に働きかけていく。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>身近な動植物を責任をもって世話する中で、動植物への愛着やいたわりの気持ちが育まれるとともに、人に対する思いやりの気持ちも育まれる。</li> </ul>
遊び	<p>4 歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>手遊び、指遊びが巧みになる。両手の協応と指先の機能分化が高次化する中で綾取り、おはじき、お手玉、まりつきなどを楽しめる。</li> <li>積み木、ブロックなどを用いての「構成遊び」が盛んになる。素材も豊かになり、出来上がった構造物に対して友達の了解を得て付け加えたりする。</li> <li>ごっこ遊びもさらに発展、充実し、子ども同士の話し合いによるイメージの共有や協力、役割分担が見られる。また、ごっこ遊びが劇遊びやペープサートに発展する場合もある。</li> <li>隠れる側と探す側との役割が理解できるようになり、完全な「かくれんぼ」が成り立つ。さらに、かくれんぼはいろいろなやり方となって現われる。</li> <li>手と足、右と左の協応運動を高次化させる全身運動としての「リズム体操」や縄跳び、竹馬、ボール遊びなどが好まれてくる。</li> <li>簡単なルールを理解し始める時期であり、「ルールのある遊び」を集団で楽しむようになる。最初はじゃんけんを用いた遊びやいろいろな鬼ごっこなどから、次第にドッジボールやキックベース、サッカー、リレーなどルールのある集団的組織的遊びへと発展していく。</li> <li>グループ間、クラス間でチームを作って競争を取り入れた遊びを好むようになる。「競争遊び」である。</li> <li>「ゲーム遊び」も楽しくなる。ハンカチ落とし、トランプ、カルタなどである。さらに、自分たちで遊具を作り、ルールを難しくして楽しむようになる。迷路図、ジグソーパズルなども好まれる。</li> <li>いろいろな打楽器を組合せ、音をそろえて簡単な合奏ができる。</li> </ul> <p>4 歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文字や数に関しては個人差がみられる。遊び（トランプ、カルタ、すごろく等）の中で文字や順番・順位などに関心をもてるようにする。</li> </ul>	<p>5 歳頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文字、数字、図形や記号を使ったいろいろな遊びが工夫されて、知的な力で楽しむようになる。（しりとり、ことばあつめ、さかさことば、じゃんけんパズルなど）</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>遊びの種類と発展過程を系統的におさえておいて、子どもの興味と意欲に応じてバランスよく取り入れていくことが基本となる。子どもが遊びを十分に体得できるようにしていくには、子どもが自主的、自発的に自由に遊びを楽しむ時間帯を十分保障することが大切である。それにより、身体的、知的、心理的など、様々な力を子どもの中に育てることができる。</li> <li>楽しい遊びを豊かに展開する中で諸能力を育てるという視点が不可欠である。優れた遊び文化を伝えることにより、運動能力や手の操作性、言語力や集団力など、さまざまな力を子どもの中に育てることができる。</li> <li>異年齢で一緒に遊んだり、生活したりする中で、小さい子への思いやりを育み、相互の違いを認め合える関係を大切にしていく。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>文字での表示や五十音表を張るなどして文字環境を整える。</li> </ul>
保育課題	<p>※ 4 歳頃は発達の質的転換期として位置付けられている。個人の力においても集団的力においても大きな飛躍の年である。4 歳頃の発達の質的転換期を豊かに越えることが</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大人や仲間が本人の存在を肯定的に受け止め、居場所を積極的に提供し「基本的な安全感」の確立を保障することがこの時期大切である。それと同時に子どもの自己内対話能力の育ちを促していきたい。また、大人があらためて子どもを権利の主体として捉え、子どもの最善の利益を保障するために子どもの言動や欲求を受け止め共感していくことが、自己決定していく際の子どものためにとって強い味方となり、「～ダケレド～スル」という行動につながる。いろいろな活動、経験の中で、自己内対話能力を育て、自己決定していくことを通して、その子らしい個性と社会性の基礎が培われる。</li> <li>文字、数量の知識、概念については、教科学習開始前に身に付けておきたい前提の力を明確化し、意図的、系統的に確かなものにする必要がある。教科学習の前提の力としては次のようなことがあげられる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>話しことばについて～日常生活において人の話を聞いて概ね理解でき、また、自分の気持ちや経験がある程度人に伝えられるようになること。</li> <li>書きことばについて～相手と共有し合いながら、話しことばを豊かに表現できること。また、自由に線が引け、形が書け、位置関係が理解できるようになること。</li> <li>数量について～ 1 0 程度の数概念が形成されていて、1 0 のまとまりを理解する力が形成されていること。</li> </ul> </li> </ul>			